

短刀名作者の『鑑刀日々抄』シリーズ所載本数比較

		鑑刀日々抄	鑑刀日々抄 続	鑑刀日々抄 続二	鑑刀日々抄 続三	鑑刀日々抄 補遺	合計
新藤五国光	在銘	2	2	3	2	3	12
	無銘	1					1
来国俊	在銘	3	5	2	4	0	14
	無銘				1		1
来国光	在銘	4	4	6	2	1	17
	無銘		1				1
長船景光	在銘	4	1	1	2	0	8
	無銘						0
正宗	在銘	1	0	0	0	0	1
	無銘	3	0	0	5	1	9
行光	在銘	0	1	0	0	1	2
	無銘	7	1	3	0	2	13

(注) 正宗の『鑑刀日々抄』には在銘が2振あるが、同じ物であり、1本とする。

短刀名作者の短刀の重要刀剣指定(第1回～第34回)本数比較

		重要刀剣 (1～34回)	
新藤五国光	在銘	16	他に無銘「新藤五」で極められているのが2振
	無銘	1	
来国俊	在銘	44	
	無銘	4	
来国光	在銘	41	
	無銘	2	
長船景光	在銘	21	
	無銘	0	
正宗	在銘	1	
	無銘	14	
行光	在銘	3	他に寸延び短刀が幾振りかある
	無銘	30	

<コメント>

- ① 景光の倍くらいのが来国俊、来国光に現存していることになる。(鑑刀日々抄も重要指定も同様) 時代の差、寿命の差、当時～現代までの人気の差として、妥当なのであろうか？ (健全さの差は同じ条件であろう)

中心の銘字を鑑刀日々抄で比較していくと、来の銘字の幅も広いと思う。(新藤五はさらに広い)

- ② 鑑定家(本間薫山)の傾向として、新藤五国光については、少し許容範囲を広げていると思う。(重要な指定では来の40%弱の本数だが、鑑刀日々抄では、来の70～85%である)

- ③ 正宗は無銘が多いのは定評があるが、行光にこれだけ無銘のものがあってもいいのか？ 重要における無銘行光は正宗、新藤五の2倍程度指定されている。作風の幅が広い＝許容の範囲が広過ぎると思う。
そもそも短刀に無銘などはおかしいという認識を持つのが正常であろう。
銘を消して無銘でも通る正宗を狙った偽作を作る。「よく出来てますねえ。だけど正宗には極められない」それなら「作風が広い行光に極めておこう」となっているのではないか。

- ④ 正宗も鑑刀日々抄シリーズを読んでいくと、「むしろ行光とも考えられる」とか「干手院かと思う」などの、表現が多い。

正宗に限らず、相州伝は山岡重厚氏が言うところの確信性がなく、短刀の無銘なんていう常識では考えにくいものが通用する。そうなると、時の鑑定権威が恣意的に決められる余地が非常に高い。

「作風に幅が広い」なんていうことになるとまさにラッキーである。
加えて、同じ無銘の短刀でも正宗となると価格は高い。怖い世界である。